

マキアヴェッリとグイッチアルディーニ：二つの共和国理論

鹿子生，浩輝
東北大学法学部：教授

<https://doi.org/10.15017/2231013>

出版情報：法政研究. 85 (3/4), pp.481-506, 2019-03-08. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

マキアヴェツリとグイツチアルデーニ

——二つの共和国理論

鹿子生 浩輝

はじめに

第一節 自由と民主政

第二節 自由と思慮

第三節 マキアヴェツリ批判

第四節 対外政策・名誉・救済

おわりに

はじめに

イタリア・ルネサンス期における有名な二人の政治思想家は、ニココロ・マキアヴェッリ（一四六九—一五二七年）とフランチェスコ・グイッチアルデーニ（一四八三—一五四〇年）であろう。前者は、『君主論』や『テイトゥス・リウイウスの『歴史』の最初の二〇巻に関する考察』（以後、『デイスコルシ』と表記）などを著し、後者は、『イタリア史』や『リコルデイ』などを執筆している。いずれもイタリアの都市国家フィレンツェに生まれた。この二人は、社会的な地位や富の違いにもかかわらず、一五二〇年代には親友となった。グイッチアルデーニの思想は、マキアヴェッリの政治理論から大きな影響を受けている。その思想的影響とは、どのようなものであったのか。この観点から本論では、両者の政治思想を比較する。

グイッチアルデーニの政治思想に関する研究は、マキアヴェッリの場合と比較すると、圧倒的に数が少ない。その一因は、彼の作品が大著『イタリア史』と『リコルデイ』のごく一部を除き、一九世紀まで公刊されなかったことにある。グイッチアルデーニの著作のうちで政治思想史の観点から最も重要と考えられる作品は、『フィレンツェの政体をめぐる対話』（以後、『対話』と表記）である。これに加えて、マキアヴェッリの政治思想との比較という見地からすれば、『マキアヴェッリの「デイスコルシ」に関する考察』（以後、『考察』と表記）も重要である。

二人の政治思想を比較検討した一九七〇年以降の先行研究を見てみよう。例えば、G・サツンは、グイッチアルデーニのマキアヴェッリからの思想的影響を論じている。¹⁾しかし、この議論は、たんに二人の共通と思われるテーマを羅列しているという印象を拭えない。いったい両者は、思想的にどの部分で共通しており、どの部分で相違しているのだろうか。末吉孝州によれば、マキアヴェッリは理想主義的な情熱があるが、グイッチアルデーニは「冷徹な打算とあくなき自己利益の追求をこととする実務家である」。²⁾しかし、グイッチアルデーニが自らの利益のみで行動し、彼に政

治的理念が不在であるかのように論じるのは、ミスリーディングであろう。先行研究には、何が彼らにとつて目指すべき政治的価値なのかという問題に対してさえも統一的な見解がない。

Q・スキナーの解釈によれば、グイッチアルディーニは、人間の本性と潜在力を称賛する場合があり、必ずしもつねに悲観的というわけではないが、マキアヴェッリは「対照的に」、すべての人間が邪悪なものとして扱わねばならないと終始一貫して考えている。^③しかし、この解釈は、グイッチアルディーニに関する命題とマキアヴェッリに関する命題の次元が異なっており、対比として不適切であるのみならず、マキアヴェッリが人間をつねに邪悪なものとして扱わねばならないと考えていたことを論証しているとは言えない。この解釈は、マキアヴェッリのテクストのごく一部からその人間観の全体を導き出していると言わざるをえない。同様の難点を抱えている研究は、佐々木毅の『マキアヴェッリの政治思想』である。^④この解釈によれば、マキアヴェッリは、「自然の秩序」観を完全に喪失しており、彼には専制支配以外の余地がないが、グイッチアルディーニは、「自然の秩序」を擁護しようとしているという。^⑤しかし、この解釈は、マキアヴェッリがもつばら邪悪な人間観を抱いていたという分析者の推測から彼の「自然の秩序」観の不在を導き出していると言わざるをえない。

J・G・A・ポークックの解釈では、マキアヴェッリの共和国理論において市民の政治的資質、つまりヴィルトゥとは、民衆（平民）の軍事力であるが、グイッチアルディーニにおいてヴィルトゥとは、「思慮」であり、それは、共和政の崩壊後に相応しい資質であるという。^⑥しかし、後述するように、ポークックは、両者のヴィルトゥ概念を対比させようとするあまり、彼らの思想を過度に単純化ないし歪曲しているように見える。^⑦彼らのヴィルトゥ概念は、このように単純化できないのみならず、そもそもグイッチアルディーニがフイレンツェにおける共和政の維持を断念していたという解釈の前提が妥当ではないように見える。

本論第一節では、マキアヴェッリとグイッチアルディーニが共有していた政治的価値を明らかにする。彼らがともに

目標としているのは、端的に言えば、フィレンツェの自由であり、それは、共和政の枠組みにおいてこそ確保されると考えられている。さらに、彼らの見解は、民衆の政治参加が不可欠だという点でも一致している。しかしながら、第二節で明らかにするように、両者は、たしかに民主政と言いうる政体を望んでいるにせよ、その政体の具体的な内実は、異なっている。マキアヴェッリは、貴族政ではなく、民主政を擁護しているが、グイッチアルデーニは、民衆の政治的能力をさほど信頼せず、有力市民の能力を重視した形式の民主政を提唱している。第三節で示すように、この相違と不可分な形でグイッチアルデーニは、マキアヴェッリの政治理論にいくつかの修正を加えることになる。また、たしかに彼は、マキアヴェッリが新しく打ち出した世俗的な視点それ自身は、マキアヴェッリと共有していると考えられる。しかも、彼らの認識によれば、共和国の自由と繁栄を目指す限り、キリスト教の中心的な価値を損なわざるをえない。しかし、第四節で示すように、マキアヴェッリは、来世における救済を放棄するという地点にまで共和国の世俗性を徹底しているが、グイッチアルデーニにとつては、そこまでの徹底を要するものではなかった。この相違は、彼が重視している政治分析のあり方にも由来していると推測できる。

第一節 自由と民主政

マキアヴェッリとグイッチアルデーニは、祖国フィレンツェではどのような統治が望ましいと考えているのだろうか。マキアヴェッリは『デイスコルシ』で、国家が自由であることが望ましく、その自由は、共和政の枠組みで確保されうると考えている。たしかに君主が善良で有能な場合、君主政でも自由な状態がありうるが、この事情は、経験的には確保されるとは言えないため、一般的には共和政が君主政に優位している(D.H.I.2)。マキアヴェッリは同著第一巻の序文や『戦術論』の序文などで、フィレンツェの読者に古代の共和政ローマを模倣するよう訴えかけている。とすれ

ば、彼は、共和政ローマを実現可能性のない抽象論として描いたのではないと見るべきだろう。

マキアヴェッリはローマ的な政治を祖国で実現するという観点から、『デイスコルシ』第一巻第五章と第六章で、共和国を二つの類型に分けている。一つは、対外拡張を進めるローマ型であり、もう一つは、支配権の現状維持を企図するヴェネツィア型（スパルタ型）である。マキアヴェッリによれば、前者は、民衆を政治に積極的に参加させるため、国内に貴族と民衆の内部対立が生じる。後者は、階級対立が不在であり、国内の静穏を維持することができる。他方ローマ型共和国ではこうした内的安定は期待できないが、この共和国は、外部からの移住を認め、さらにその移住者を軍事に参加させる。ローマ型共和国は、こうして軍事力を増大させ、大国へと発展しうる。この見地からマキアヴェッリは、ローマ型が望ましいと結論づけている。

マキアヴェッリのこの議論は、当時の政治的文脈ではどのような意味があつたのだろうか。民衆の政治参加を促進する議論は、当時の言葉では、「制限的政体」よりも「開放的政体」を指していることになる。メデイチ家はフィレンツェ復帰後も、大評議会体制を維持しようとしていたが、一部の有力市民がその方針を転換させた。しかしフィレンツェ市民の大半は、メデイチ家の復帰が決定的となつた後も、大評議会体制の廃止を意図したわけではなかつた。⁽⁸⁾その後メデイチ家は、有力市民に依拠しつつ、差し当たり寡頭政的な制度を形成していたが、この方向は、必ずしもフィレンツェに安定をもたらさなかつた。そのため、メデイチ家の一部ですら大評議会の復活を検討していたとしても不思議ではないだろう。⁽⁹⁾

『デイスコルシ』の民主政擁護論は、貴族政と民主政の体制選択というフィレンツェの政治的争点に対応している。この政治的文脈を踏まえるならば、マキアヴェッリの議論は、祖国に民主政の採用を要請していることになろう。彼は、そこで支配的な見解に挑戦する形で自らの主張を展開し、民衆が優れた人物を選出する局面では高い判断能力を有していると訴えている（D.I. 18）。民衆の能力を擁護するこの議論は、当時の読者からすれば、大評議会体制の関連なし

で読むことはできないだろう。

実際、マキアヴェッリは『デイスコルシ』執筆の数年後、メデイチ家からの下問により『小ロレンツォ公没後のフィレンツェ統治論』を執筆し、「開放的政体」、つまり民主政を推奨している。そこで彼が論駁しようとしている中心的な立場は、一五世紀のメデイチ家統治のような貴族政（寡頭政）への回帰を目指す政治的立場である（DR 159-162）。「開放的政体」の路線は、メデイチ家が貴族よりも民衆を自らの支持基盤とすることであると見えよう。

民衆寄りのこの方策は、『君主論』第九章の「市民的君主」に関する議論で提唱されている。「市民的君主」という君主類型は、フィレンツェを想定した議論である。マキアヴェッリはその類型については、共和国に関する著作へと読者を誘導している（P.VIII）。そのため、『君主論』の読者メデイチ家は、関心があれば、『デイスコルシ』を手取ることになろう。だとすれば、マキアヴェッリは、フィレンツェに関する限り、メデイチ家に民主政ないし大評議会体制を採用するようメデイチ家に提唱していることになる。

たしかに『君主論』での多くの考察は、専制的支配とも言いうる統治術を提供しているが、悪徳を勧めるそれら多くの助言は、フィレンツェのためのものではない。そこで大半の考察は、メデイチ家の若者たちがイタリア北中部の新しい教皇領諸国を支配するための議論である。というのも、メデイチ教皇を後ろ盾とした同家の若者たちは、フィレンツェ政治の場合とは異なり、権力篡奪ゆえに支配が至極困難となる「新君主国」をいかに維持するかという課題を抱えると予想されたからである。^[1]『君主論』は、篡奪や征服で成立した国家、つまり「新君主国」へと議論の的を絞り込んでいるのである。

変革は、まず、新君主国すべてに共通する当然の困難から生じる。すなわち、そこでは人々は、状況が改善されると信じて、進んで君主を変えようとし、この信念ゆえに君主に対して武器を手取るのである。……変革がもたらされ

るもう一つの明白でもっとも必然性は、新君主になる人物が新しく征服する際、兵士やその他の無数の加害行為のため、つねに住民を傷つけざるをえないことである（Pr-III）。

このようにマキアヴェッリは、支配の正当性が欠如した特異な状況を考察の主要な対象としているのである。この例外的な状況を想定しながら描写される人間が邪悪であるのも当然であろう。そうした人間描写は、必ずしもマキアヴェッリが邪悪な人間観を抱いていたことによるものではない。⁽¹²⁾

しかも『君主論』は基本的に、イタリア北中部のローマニア地方で獲得される諸都市を念頭に置いている。一五一五年一月三十一日の書簡からは、「新君主国」がローマニア地方の諸都市であることがわかる。

パオロからではなく、人々の噂で聞いたのですが、彼（ジュリアーノ）がパルマ、ピアチェンツァ、モデナ、レッジヨの支配者になるとのことです。彼の支配は、最初に適切に統治されれば、立派で強力なものになり、いかなる事態においても維持されると思います。それをよく統治しようと思えば、対象の性質を理解しなければなりません。新君主によって獲得された新しい諸国家には、それを維持しようとする場合、きわめて多くの困難が伴います（LE, 294f）。

この書簡の続きによれば、ジュリアーノ・デ・メディチは、『君主論』での主張と同様に、チエーザレ・ボルジアを模倣しなければならぬ。マキアヴェッリの考えでは、その諸都市を篡奪したメディチ家は、支配の正当性が欠如しているため、専制的な支配を課さざるをえない。悪徳が必要であるという主張は、トスカーナ地方のフィレンツェとは異なり、ローマニア地方がそもそもきわめて混乱した状況にあり、住民の公共精神が期待できないというマキアヴェッリの認識にも由来している。

なお、マキアヴェツリがフィレンツェに拡大型共和国を推奨したことは、イタリア内部での勢力均衡政策がもはや通用しないという判断の表れでもある。そのことは、一五世紀に見られたメディチ家統治の現状維持政策の否定を意味する。言い換えれば、マキアヴェツリは、それ以前の対外拡張政策へと回帰させようとしているのである。この方策は、対外拡張を試みようとする市民の期待に応えることでもあり、その市民の中には、次に見るように、かつてのメディチ家の現状維持政策に不満を持つグイッチアルディーニのような人物が含まれている。

第二節 自由と思慮

グイッチアルディーニも、状況に応じた統治が不可欠であるという認識をマキアヴェツリと共有している。「統治の様式は、統治されている領土や場所の違いに従って異なるべきである (GH, 261)」¹³。彼の認識では、例えば、ローマニア地方の諸国では、秩序の確立のために専制的支配が不可避的である。彼は一五一六年以降、モデナやレッジョを統治した際に「残酷さ」を遺憾なく発揮した。彼はその後、さらにバルマとピアチェンツァの獲得を目標とすることとなる。なお、この四つの都市は、マキアヴェツリがジュリアーノの新君主国として書簡で言及していたローマニア地方の諸国である。他方、グイッチアルディーニはマキアヴェツリと同様に、フィレンツェでは自由な統治が望ましいと考えている。彼によれば、自由な統治の対極は、専制であり、フィレンツェ市民は、絶えず専制君主の登場を警戒しなければならぬ (D1, 233)。メディチ家のフィレンツェ復帰直前に執筆された『ログローニョ考』(一五二二年)によれば、「自由がわが都市の本来的で自然な属性であるから、一人、少数、多数のいずれの統治が優れているかを論じる必要はない (D1, 255)」¹⁴。グイッチアルディーニにとって、自由な統治は、しばしば民主政と同義である。

グイッチアルディーニはメディチ家の復帰後ですら、多数の市民が政治に参加する「民衆的統治」が祖国に不可欠で

あると考えている。彼によれば、フィレンツェは長い間、自由で民衆的統治を採っており、さらに、メデイチ家追放後の一八年間、市民たちは、いっそう「民衆的統治」の「甘美さ」を味わった。そのため、彼は、復帰したメデイチ家がこの市民的性格を十分に把握しておくべきであると進言している (GF, 264-265)。

しかし、グイッチアルディーニの見解では、大評議会のような民衆的制度をフィレンツェに導入するだけでは不十分である。『フィレンツェ史』によれば、フィレンツェ民主政の難点は、継続的な政策の不在、統治経験の乏しさ、審議の長期化や機密の漏洩にある (F, XXXIII)。そこで彼は、これらの欠陥に対する解決策として終身執政長官と元老院的機関の創設を提唱している (F, XXXIII)。「ログローニョ考」も、両機関が不可欠という点で同じ政治路線にある。さらに、『一五二二年のメデイチ家復帰後のフィレンツェ統治論』も、この路線に大きな変更はない。その主張によれば、一八年間の民主政の経験を踏まえるならば、「民衆に名誉や利益をその資質や相応しさに応じて配分すること」は不可避的である。とはいえ、彼の力点は、メデイチ家が少数者たる有力市民を信用し、彼ら都市貴族の権限を強化することに置かれている (GF, 266)。「メデイチ家の支配権の安定策について」(一五一六年)でも、有力市民の権力増大を提唱している。この著作によれば、メデイチ家のフィレンツェ統治は、新教皇の誕生で安定するかに思われたが、実際には不安定である (MA, 267-268)。その理由は、フィレンツェ市民が一四九四年から一五二二年までに「良き共和国」の統治形態を採り、そこには自由があつたが、今やその「開放性」が失われている点にある (MA, 276)。そのため彼によれば、メデイチ家は、民衆への配慮を怠ってはならないが、重要なことは、有力市民を信頼したうえで彼らと共同で都市を統治することである。

民主政を基盤としつつも有力市民の能力を活かそうとするグイッチアルディーニの姿勢は、その後の『対話』(一五二五年)でも変わっていない。たしかにその第一巻では、自由な統治ないし民主政そのものが否定的に扱われている⁽¹⁴⁾。しかし、第二巻では、その民主政ないし「開放的政体」をフィレンツェに導入すべきだという正反対の主張を展開して

いる。第二巻を政体の観点から要約するならば、まず一人支配は、一般的に望ましくなし、この都市がすでに自由を味わっているという事情も考慮されるべきである。フィレンツェ市民が自由と平等を愛しているというこの特殊事情は、少数者統治、つまり「制限的政体」を支持しない理由でもある。この政体は、党派闘争を発生させるため、フィレンツェには最悪の統治である。したがって、民主政がフィレンツェに自然であり、それが適切に機能するよう制定することは可能である。グイッチアルデーニの結論が第二巻の見解にあることは、第二巻の途中で第一巻の見解を修正していること、第二巻の見解が彼の以前の見解と一致していることから明らかであろう。

さらに言えば、次の一節から読み取れるように、グイッチアルデーニはその「序文」で、メデイチ家の統治を批判し、自由の回復を期待している。⁽¹⁵⁾

フィレンツェは、メデイチ家の権威や教皇の巨大な権勢のために、現在その自由を失っているかのように思われるが、にもかかわらず、人間の事柄で日常しばしば生じている出来事のため、一人支配がいつ何時、以前の自由な統治に戻るかもしれない。民衆的統治が一瞬でいとも簡単に一人支配に戻つたのと同様である。一家門が一共和国に比べて永続するであろうと望むのは、疑いなく難しいため、元に戻ることは、大いにありうる。仮にこのようなことが生じれば、われわれのこの考察と議論は、完全に無益ということにはならないだろう。特にピエロ・ソデリーニが執政長官であった時の最近の例が示しているように、この時期にフィレンツェでは、立派で称賛に値する政体をほぼ採用するところに近づいていたのである。フィレンツェの事情は、このような祝福を受けることができなほほどには墮落していないし、怠惰ではないように思われる (DF, proemio, 34)。

彼は『対話』執筆の時期には、もはやフィレンツェの民主政に期待せず、メデイチ家の君主政ないし絶対君主政を受け

入れたと解釈する研究があるが、その解釈は、右に見てきた議論をからすれば、ミスリーディングであろう。¹⁶グイッチアルディーニにとって、むしろソデリーニ時代の民主政こそ称賛に値する政体に近い。彼は、メディチ家不在の自由な共和国を構想しているのである。

ただし、グイッチアルディーニの考えでは、その民主政には元老院をはじめとする貴族政的制度が必要であり、『対話』第二巻で指摘されているように、それらを備えるならば、混合政体が実現するだろう。彼の一種の民主政批判は、民衆が平等に政治に参加するという統治のあり方に向けられている(103)。この主張の決定的な根拠は、民衆の政治的判断力の欠如にある(100)。たしかに官職者は、その地位が特定の人物や集団の最良に基づいていると判断できないよう、規模の大きな評議会で選出されなければならない。大評議会は、有力市民が腐敗しないための工夫であるし、優れた有力市民が民衆から称賛を獲得するための手段でもある。しかし、大評議会に重要な決定を委ねることは、民衆の無知ゆえにフィレンツェの自由維持にとって致命的である。グイッチアルディーニは、例えば、『対話』第一巻で、民主政の重大な欠陥の一つが外交能力の欠如にあると指摘し、これを補うために第二巻では、元老院に外交を担当させようとしている。彼の狙いは、思慮を具えた少数の有力市民に重要な役割を与えることであり、その意味で彼は、「思慮ある民主政」を理想としているのである。

第三節 マキアヴェッリ批判

マキアヴェッリが新しく試みたのは、ローマの繁栄の原因を神の摂理に求めることでも、あるいは、安易に運や偶然(つまりフォルトゥナ)に求めることもなく、可能な限り人為に基づかせた様式を提供することである(DT-II, 1)。¹⁷グイッチアルディーニは、おそらくこのことに大きな影響を受けているか、あるいは、少なくとも同様の視座を抱いて

いる。彼によれば、アウグスティヌスは、神が人間の善行には報いを、悪行には罰を必ずもたらすと説いており、たしかにそうしたこともありうるという。しかし、彼は、それとは別の説明も、可能であろうと述べている。例えば、相続における富の減少は、神の罰とは異なる観点から説明可能である（C33）。グイッチアルデーニがマキアヴェッリと共有しているのは、政治的現象を神の摂理に求めることに満足せず、それを世俗的観点から説明しようとする姿勢である。

しかし、グイッチアルデーニは、その世俗的な説明様式の枠内でマキアヴェッリのいくつかの具体的な説明には異論を呈している。彼の政治的立場は、単純な民主政を牽制するものであり、この見地から彼は、マキアヴェッリの政治的理解を修正しようと試みている。本論では、まず、次の三点に着目しておく。

（一）民衆の能力への批判

第一に、マキアヴェッリが民衆の能力を高く評価したことに対する批判である。すでに触れたように、彼は、民衆が立法の能力を欠いているにせよ、官職者選出における判断能力を具えていると主張している。さらに、彼によれば、民衆は、大局的な判断では誤ることが多いが、官職や名誉の分配のような個別的判断ではそうではない（DT, I, 47）。大評議会の主要な機能は、官職者の選出であった。これらの議論は、おそらく大評議会体制を擁護する意図に基づいているのであろう。

しかし、グイッチアルデーニの『考察』によれば、民衆は、君主よりも無思慮と不安定性とにおいて際立っている。ローマの民衆は、実際には重要事項の決定をコンスルや元老院などの主要な官職に委ねており、マキアヴェッリの例示は、適切ではない（CM, I, 38）。官職や名誉の分配において民衆が間違えないというマキアヴェッリの議論は、事実で

あるが、それは、民衆自身の判断に基づいているというより、時間や経験を経た一般的判断に基づいているためである (CM.I.45)。グイッチアルディーニの立場は、大評議会で民衆の役割の一部を肯定するものの、重要事項への民衆の介入を阻止するものである。

(二) 歴史解釈と方法論への批判

グイッチアルディーニにとつては、マキアヴェッリの共和国理論を支えているローマ史理解も、いくつかの点で不適切である。まず、マキアヴェッリは、ローマが軍事的かつ制度的に卓越していたと解釈していたが、グイッチアルディーニの考えでは、ローマは、軍事的には卓越していたものの、その政治制度は、内部対立を抱え込んでいたために有害であった。彼によれば、内部対立が都市を自由かつ有力にしたわけではない。ローマは、軍事力がその欠点を補ったにすぎないのである (DF.II.150, CM.I.4)。

次に、マキアヴェッリは、ローマの軍事力が民衆の政治参加に基づいており、その政治参加は、内部対立を不可避的に伴うと論じていた。しかし、グイッチアルディーニの歴史解釈では、対立の原因は、貴族と民衆を階級として区分し、後者を政治に参加させなかったこと、さらには、貴族が民衆に過度に抑圧したことにある (DF.II.150-151, CM.I.5)。グイッチアルディーニは、マキアヴェッリが想定していた二つの関係、すなわち、民衆の軍事参加と民主政との密接な関係を断ち切ろうとしている。彼からすれば、共和国の強力な軍事力は、民主政や内部対立を不可避とするわけではない。

グイッチアルディーニによれば、ローマの優れた軍隊は、王政時代にすでに創設されていた。しかもローマは、武力を有する隣国に囲まれていたため、そこには弛緩する機会がなかったし、ローマ人には「真の栄光への渴望や、燃えるような愛国心や、その他の多くの美德」があった (DF.II.156-157 Cf. DF.I.92)。マキアヴェッリは、フィレンツェが

ローマを模倣すべきだと繰り返していたが、グイッチアルデーニによれば、フィレンツェとローマの置かれている環境があまりに異なるため、フィレンツェが後者を模倣することは困難である (C117, CMI.4)。すなわち、彼の批判は、マキアヴェッリがローマとフィレンツェの様々な諸条件を捨象し、政治的事象を過度に一般化していることに向けられている。「話をするたびにローマ人を引き合いに出す人々は、いかに間違っていることか。ローマ人を引き合いに出すには、まったく同じ条件の都市を持たねばならない」(C110)。

グイッチアルデーニが重視する市民的資質は、「思慮」であるが、それは、政治分析においても用いられるべきものでもある。すなわち資質とは、具体的な状況において様々な事象を総合的に判断する能力⁽¹⁸⁾でもある。彼の考えでは、人間行動に関する絶対的で確定した規則は存在しないため、具体的状況に即して判断しなければならない (C106, C112)。かつて成功を収めた行動であっても、ごくわずかに事情が異なれば、失敗する可能性がある。

(三) 軍事力に関する疑念

『対話』の論点の一つは、フィレンツェの市民軍 (民兵軍) 導入をめぐる問題である。第二巻で対話者カッポーニは、メディチ家の対外政策が党利に基づいていたため、フィレンツェに有害であったと論じている。しかも彼によれば、メディチ政権は、領土を拡張しなかった。彼の力説するところでは、仮に民主政が思慮などの資質に欠けているにせよ、それを補う武力があれば、少なくとも祖父たちの遺産を維持することはできる。彼の見解では、それは、「名誉」などであり、フィレンツェは、武装すれば、より強大となるう (DF-II, 8890)。

しかし、この主張を踏まえて主人公ベルナルド (つまりグイッチアルデーニ自身) は第二巻で、フィレンツェには武装する能力があるが、それを完成させられないのではないかという疑念を表明している。彼によれば、フィレンツェ

市民は、かつては武装していたが、その後は傭兵に依存しており、ゆえに共和国は、弱体化している。そのため、市民の武装が必要である。しかし、それを大衆に説得し、さらに兵士が上官に服従するよう制御することは困難であろう。ところが、続けてベルナルドは、「私は、これらの理由でその〔市民軍の〕試みに反対しようとしているのではない」と明言し、兵士の暴動を抑えるよう手を尽くし、市民軍の導入に適切な時期を慎重に選ばねばならないと主張している（DF-II, 90-93）。

ベルナルドが市民軍の完成度に関する疑念をいったん表明したのはなぜだろうか。マキアヴェッリの創設した市民軍は、一五二二年のプラートの戦いで惨敗を喫した。ただし、マキアヴェッリは『戦術論』で、その敗因が市民軍の完成度の低さにあり、けっして市民軍それ自体にあるのではないと弁明することとなる（AG-I, 945-946）。『対話』で想定されている舞台は、一四九四年時点のフィレッツェであり、それゆえ、市民軍は、まだ創設すらされていない。『対話』執筆時のグイッチアルディーニは、対話の時点よりも未来の出来事、つまりフィレンツェ軍の敗北を知っているため、市民軍が不完全になることを先取りしているのではなからうか。市民軍の前途に対する悲観的な見方の理由の一つは、この事情にあらう。彼は『フィレンツェ史』で、ソデリーニがマキアヴェッリの説得により、市民軍の創設を試みたが、それが目新しい事業であるから、慎重かつ漸進的に実現されねばならなかったと叙述している（SF-XXVI）。

グイッチアルディーニによる市民軍の提唱は、初期の『ログローニョ考』ですでになされておられ、マキアヴェッリの主張と軌を一にしている。ポーコックは、グイッチアルディーニが『対話』第二巻でも市民軍の設立に期待を寄せていないと論じているが、ベルナルドの右の主張からすれば、こうした解釈にはやや無理がある¹⁹。ベルナルドは、もしローマが軍事を傭兵に依存していたら、数年も経たずに減んでいただろうと指摘している。彼によれば、武装しない共和国は、軍事力を補う注意力、警戒、勤勉、術策などが必要になる（DF-II, 154-155）。グイッチアルディーニは、フィレンツェの有力市民にローマ人以上のそうした諸能力を期待できたのであらうか。ポーコックは、グイッチアルディーニによつ

説論
て「武装せざる都市が甘受された」と解釈している。⁽²⁰⁾だが、『対話』のベルナルドは、そこまでは主張していない。また『考察』でのグイッチアルデーニのそれに関する態度は、両義的である (CM, II, 19)。

マキアヴェッリの主要な政治的意図は、貴族政の擁護論に対抗し、民主政の導入を積極的に推進することにあつたため、貴族特有の機能を共和国の制度に組み込む議論を前面には押し出してはいない。彼の民主政擁護論の中心的根拠もまた、支配権の拡大のためには民衆を武装させねばならないという点にあり、それゆえに彼の共和国のヴィルトウの中心核は、民衆的軍事力と言つても差し支えないだろう。とはいへ、マキアヴェッリも、けつして共和国の無思慮な権力拡大を推奨しているわけではない。さらに彼は、官職者の選出における民衆の判断能力を高く評価している。これは、ポークックの強調とは異なり、民主政を擁護するうえで不可欠な民衆的資質であり、民衆のヴィルトウがもつぱら軍事的な能力と見ているわけではない。

グイッチアルデーニは、単純な民主政擁護論を中心的な批判の対象とし、いわば貴族政寄りの民主政を擁護しようとしたため、議論の位相がいわば横滑りしている。グイッチアルデーニは、民衆の政治参加を牽制したにせよ、軍事参加が政治的要職への参加に直結しないのであれば、民衆の軍事参加を否定する理由はない。二人は、強調点こそ異なるものの、軍事力と思慮を具備する共和国を望んでいたと見るべきであろう。

第四節 対外政策・名誉・救済

(一) 国家の名誉と対外的思慮

グイッチアルデーニの民主政理論は、個々人の資質の相違を政治に活かすという点でマキアヴェッリの理論を洗練

させていると言えよう。彼の考えでは、有能な市民は、名誉欲ゆえに階層的な政治制度を一步ずつ最高の名誉職を目指して進むであろう。その政治は、実力主義に基づいており、身分を前提とした貴族主義ではない。さらに、彼にとって、有能な市民が他の市民から名誉を獲得することは、フィレンツェが他国民から名誉を獲得することとパラレルである。対話者ソデーニは、都市の安全だけでなく、その「名誉」や「偉大さ」(grandezza)を考慮する必要がある、政体の優劣がさほど異ならないように見れば、この考慮が重きをなすと論じている (DF, II, 94)。

実のところ、ベルナルドが第二巻で正式に自らの議論を翻すのは、国家的名誉に関するこの議論の直後である。グイッチアルディーニにとって、市民軍に基づく軍事力は、フィレンツェの支配権の維持と拡大において不可欠であり、それは、国家の名誉獲得の手段でもある。彼は、自身の名誉獲得に強烈にこだわっている (CI18)。しかし、それは、彼にとって国家レベルでも譲れない価値であったと言えよう。

だが、共和国が他国より偉大である状態は、共和国が他国を支配している状態でもあろう。次に示すように、対外政策の点でもグイッチアルディーニは、マキアヴェッリの議論を強く意識しながら、彼とはいささか異なる結論を示している。

『対話』第二巻はマキアヴェッリの『デイスコルシ』と同じく、共和国が支配権を拡大すべきか、あるいはその現状を維持すべきかという問題を提起している。ベルナルドによれば、われわれは、他国の領土を支配する側にあり、この道から撤退することはできない。そのため、難なく領土を手に入れる機会があれば、それを獲得すべきである。例えば、アルプスの彼方の諸大国がイタリアに侵攻しないという前提なら、支配権を積極的に拡大すべきである。実際、ルッカやシエナの獲得は、称賛に値する (DF, II, 159)。

しかし、グイッチアルディーニによれば、それら大国は、フィレンツェを破滅させようとするか、抑制しようとするだろう。大国がイタリアに居座る場合、多くの領土、特に要衝の地の獲得は困難だろう。しかもフィレンツェは、領土

拡大には不都合な場所にある。すなわち、その場所は、ローマ教会に近いうえに、トスカーナにはヴェネツィアの場合とは異なり、自由を希求している諸勢力が溢れている。フィレンツェは、機会があれば、その利益を手に入れるべきであるが、ピサを奪回するにせよ、諸大国がイタリアに居座るならば、その後は領土のさらなる獲得はしないほうが得策である (DE-II, 159-161)⁽²¹⁾。このようにグイッチアルデーニの議論は、具体的政局を踏まえた政治的思慮の観点から議論を展開している。ただし、彼は、支配権拡大の原則そのものは支持していると言えよう。

とはいえ、フィレンツェ共和国の支配権拡大は、他国には有害である。グイッチアルデーニは、ピサに対処するには、残酷さが必要だと明言している。『対話』によれば、民主政権は、残酷な方策に反対しがちであるが、ピサは、根深い執念を抱く敵であり、その獲得や支配には徹底した暴力が不可欠である。フィレンツェは、可能な限り慈悲心や親切さを示すべきだとはいえ、選択の余地がなければ、残酷さに訴えねばならない (DE-II, 161)。

(二) 名誉と救済

グイッチアルデーニは右の議論に続けて、自らの曾祖父ジノの言葉を引用している。すなわち、戦争一〇人委員会の一員として任命すべきは、「己の魂よりも祖国を愛する」市民である。彼によれば、今日、国家や権力を維持しようとする人は、キリスト教の法の命令に従ってそうすることはできない。というのも、領土拡大の欲望を抱くならば、殺人や略奪などの悪行に手を染めねばならない。良心に基づきつつ戦争を行うことは、不可能だからである。「私がピサ人を殺せとか、獄に入れておけと言う場合、キリスト教徒としては語っていない。国家の理性と慣習に従って語っているのである (DE-II, 162-163)」。『神の意志に従って生きようとする者は、誰であれ、この世の生活から遠ざかっていなければならない。だが、神を怒らせずしてこの世で生きるのは困難である。事物の本性をそのまま探究したように語

るならば、神を怒らせずにはいられない」（DF-II, 163）。

共和国の世俗的繁栄を追求するならば、キリスト教の中心的教義、すなわち、来世における救済は、放棄せざるをえない。マキアヴェッリは、天国へ行くというキリスト教の教えゆえに同時代人が弱体化していると考えている。

われわれの宗教は、真理や正しい生き方を教えるけれども、現世の名譽を評価しないよう教える。他方、異教徒は、現世の名譽を重視し、それを最高の善と見ていたため、彼らの行為にはわれわれよりも力強さがあつた。……古代の宗教は、軍隊の隊長や共和国の指導者のように、現世の栄光で満ちている人間でなければ、美化することはなかつた。われわれの宗教は、活動的な人々よりも服従的で観想的な人々を称えている。われわれの宗教は、謙遜や服従に最高の善を置き、人間世界の事柄を軽蔑する。他方、古代の宗教は、精神の偉大さ、身体の強靱さ、きわめて強力な人間にするための他の事柄すべてに価値を置いている。われわれの宗教が力強さを要求する場合、力強い事柄を行えというよりも、忍耐強くあれということの意味している（DF-II, 2）。

マキアヴェッリがサヴォナローラの行動から得た教訓の一つは、文明的なフイレンツェ人ですら容易に宗教的權威に従うということである。『ディスコルシ』第一巻第一章によれば、フイレンツェ市民は、サヴォナローラが奇跡を実際に起こしたわけでもないのに、彼に盲目的に従つた。だとすれば、今のフイレンツェに同じことができないうわけではなだらう。彼はその章で、新しい宗教の導入を不可能ではないと見ている。彼は、市民が国家のために貢献し、来世での救済を放棄する宗教をフイレンツェに導入すべきであると論じているのである。

次の一節からも看取できるように、グイッチアルディーニもマキアヴェッリと同様に、キリスト教徒の理想的な姿と都市共和国の価値とが究極的には両立しないと認識している。

宗教と善き習俗を軽蔑しない場合、祖国の利益に熱心であり、他人に危害をあたえない市民は、完全に良き市民である。サン・マルコのわれわれの友人〔サヴォナローラ〕のこの過度な善は、しばしば偽善である。それは、偽善でなく、キリスト教徒にとっては、あまりにも当然のことかもしれない。だが、それは、都市の幸福にとっては、無益である (B179)。

別のリコルデイによれば、「過度の宗教は、世界を破壊させる。なぜなら、それは精神を軟弱にし、人々を無数の過誤に引き込み、多くの勇敢にして男性的な企てから逸脱させるからである (B32)」。ここには、「真の栄光への渴望」や「男性的な」勇敢さを市民に要請するマキアヴェツリ・異教的な主張が垣間見られる。

とはいえ、グイッチアルディーニは、このリコルデイを次のように続けている。「私は、キリスト教の信仰や神の崇拜を傷つけようというのではない。むしろ過度なものと適度なものを区別し、それによって人間の精神を促し、何が考慮されるべきであり、無視されるべきかを考えさせることで、それを強化し、増大しようとしているのである (B32)」。しかし、彼の言う「適度な宗教」は、「真の栄光への渴望」、「男性的な」勇敢さ、さらには「国家理性」的な残酷さを持ちうるのだろうか。さらに彼は、マキアヴェツリとは異なり、国家宗教をフィレンツェに求めなかった。マキアヴェツリにとっては、彼の主張は、理論的に徹底していない「中途半端」な道であると見えたかもしれない。だが、彼は、そこまでの必要性を感じなかったし、その実現可能性を低く見ていたのだろう。彼は、マキアヴェツリよりも思慮深い現実主義者であると言えよう。

（四）共和国とイタリア

理論的帰結に関する同様の「中途半端」な道は、グイッチアルディーニのイタリア論からも看取できる。マキアヴェッリは、共和政ローマのようなイタリア支配（さらには全世界の支配）をフィレンツェの理想としていた。しかしグイッチアルディーニは、共和国を頂点とする一つの帝國的支配がイタリアに本当に幸福をもたらすか見当がつかない、と述べている。「なぜなら、もし一つの共和国の下でイタリアの名に栄光が生まれ、支配する都市共和国が幸福となったとしても、その影で他のすべてが抑圧されているため、それら「他の諸都市」は、偉大さに到達する能力を持たないからである。共和国の慣習は、その自由や支配の果実を同胞市民以外の者たちと共有しない」（MCI.12）。共和国が覇権を握ることは、他国を服従させることであり、共和国の他国を支配している状態は、君主国が他国を支配する場合よりも、はるかに過酷である（C107）。

そのため、グイッチアルディーニは、むしろ諸国の共存状態こそイタリアにおける一定の幸福であると主張している。イタリア人の気質は、強力かつ知的なので、どのような支配も容易にこの地域を服従させることができない。むしろそれは、つねに自由を欲してきた。私は、ローマ人を除いて、それを完全に所有する他の権力があつたという記録を信じない。彼らは、共和国が衰退し、皇帝たちが力において衰退した時、イタリアの支配権を容易に失つた。私は、もしローマ教会が統一に反対してきたとしても、この地域が不幸であつたという見解に安易には賛成しない。というのも、きわめて古代的な慣習と性向に即した生活様式がそこに維持されていたからである（MCI.12）。

イタリアでの複数の諸国の共存は、ローマ崩壊後のいわゆる中世やルネサンス期に見られた状態であり、この状態は、

共和国内部で市民たちが共存している状態とパラレルである。その意味でもそれは、ポリス的であり、「古代的な慣習」に即している。だが、グイッチアルデーニは、一方で共和国の支配権拡大を是としつつ、他方でイタリアでの諸共和国の共存関係を求めていることにならないだろうか。それは、マキアヴェッリには理論的徹底さを欠いていると見えたのではなからうか。しかし、グイッチアルデーニは、イタリアの具体的状況に即した判断、つまり思慮を重視するゆえに、そうした理論的な徹底を不要としたのかもしれない。

おわりに

グイッチアルデーニは、祖国の自由維持のために民主政を要するという点でマキアヴェッリと見解を共有している。しかし、彼は、民主政に有力市民の思慮を活かす仕組みを導入しており、いわば貴族政原理を民主政原理と結合させている。その意味で彼の共和国理論は、マキアヴェッリの民主政を洗練させたものと言えよう。彼にとって重要な市民的資質である思慮は、置かれている政治状況を具体的・総合的に判断する知性であり、それは、政治分析の際にも重要である。グイッチアルデーニは、マキアヴェッリの過度な一般化に対してこの観点から修正を加えている。

マキアヴェッリは、キリスト教の救済の教義が市民の自由への意欲を衰退させているため、国家への貢献を要請する宗教がフィレンツェに導入されるべきだと考えている。これは、共和国という価値を重視し、来世での救済という価値を放棄することでもある。他方、自身と共和国との名誉にこだわるグイッチアルデーニは、マキアヴェッリと同様に共和国の発展がキリスト教のこの中心的教義とそぐわないことを認識しつつも、彼のように生の意味を現世に限定することはなかった。その理由の一つは、彼の理論が思慮を重視するものであるため、マキアヴェッリのような理論的徹底を要するものではなかったことにある。彼は、その意味でマキアヴェッリよりも現実主義的である。

- (1) Sasso (1984), なお、一九七〇年以前の先行研究については佐々木 (一九七〇)、二五七―二六二頁を参照。F・ギルバートの『マキアヴェッリとグイッチアルディーニ』は、貴族と民衆の二勢力の対立という当時の政治的背景に即しているが、そのタイトルにもかかわらず、二人の政治思想の本格的な比較はなされていない。Gilbert (1965)。
- (2) 末吉 (一九九六)、二六四頁。
- (3) Skinner (1978), pp. 185-186。
- (4) 佐々木 (一九七〇)、七八頁。
- (5) 佐々木 (一九七〇)、二七〇―二七三、二九七、三三三頁。
- (6) Pocock (1975), pp. 252, 266。ポークックの『マキアヴェリアン・モメント』に関する批判については、鹿子生 (二〇一七) を参照。なお、彼は別の論文で、正当にも、前近代性という点にマキアヴェッリとグイッチアルディーニの共通性を見出ししている。Pocock (1978)。
- (7) 家田によれば、マキアヴェッリは、支配者の側から国家の建設・強化を考えたが、『グイッチアルディーニ』は、エスタブリッシュなものとして国家を考え、その中でいかに家臣は勤めて行ったらいいかを語った。家田 (一九七二)、五六―五九頁。たしかにグイッチアルディーニは、メデイチ家の臣民であるかのように振る舞ったと言えなくはないが、しかし、メデイチ家への服従をあるべき姿として語っているようには見えない。
- (8) Butters (1985), ch.7, Devonshire-Jones (1972), pp. 67-70, Stephens (1983), pp. 59-62。
- (9) Stephens (1983), pp. 109, 111, Silvano (1985), pp. 82-86。
- (10) 鹿子生 (二〇一三)、二七〇―二七四頁。
- (11) 鹿子生 (二〇一三)、一八三―一九五頁。
- (12) すでに示したように、マキアヴェッリは、邪悪な人間観を抱いていたと解釈されるが、『デイスコルシ』はもとより、『君主論』においてですら、善良な人間が度々描写されている。「このように人間の本性とは、恩恵を受けても与えても恩義に感じるものである (PX)」。また、マキアヴェッリによれば、「人間は、完全に邪悪であることも、完全に善良であることも、きわめてまれである (DT1, 27)」。この箇所を見るだけでも彼が一貫して邪悪な人間観を抱いていたと解釈することは難しいだろう。
- (13) Ridolfi (1967), chs. 8-9。
- (14) 『対話』は、序文と二つの巻で構成されている。いずれの巻でも、四人の登場人物の対話という議論形式が採られており、その人物とは、ベルナルド・デル・ネーロ、ピエロ・カッポーニ、パゴラントニオ・ソデリーニ、ピエロ・グイッチアルディーニである。このうち著者グイッチアルディーニの代弁者は、明らかにベルナルドである。対話の(架空の)舞台は、一四九四年の

大評議会導入の直後である。

- (15) 鹿子生 (二〇一八)。
- (16) Phillips (1977), pp. 37, 91. Cadoni (1999), pp. 59-60. 佐々木 (一九七〇) 三二〇頁。
- (17) 鹿子生 (二〇一三) 二八八—二九四頁。
- (18) Cf. Zimmermann (2015), p. 26.
- (19) Pocock (1975), pp. 241, 244. 同様の解釈を示すスキナーもまた、ヘルナルドが発言を撤回する前の議論にその根拠を求めている。
Skinner (1978), p. 173.
- (20) Pocock (1975), p. 256.
- (21) フイレンツェのボサ獲得後に生じた両国の法的問題に関するグイッチアルディーニの対応は、次の文献を参照。Gavallar (1993).

【参照文献・略記】

Butters, H.C. (1985) *Governors and Government in Early Sixteenth-Century Florence 1502-1519* (Oxford: Clarendon Press).

Cadoni, Giorgio (1999) *Un governo immaginato: L'universo politico di Francesco Guicciardini* (Roma: Jouvence).

Devonshire-Jones, Rosemary (1972) *Francesco Vettori: Florentine Citizen and Medici Servant* (London: The Athlone Press University of London).

Gavallar, Osvaldo (1993) 'Francesco Guicciardini and the "Pisan Crisis": Logic and Discourses', in *The Journal of Modern History*, 65, pp. 245-285.

Gilbert, Felix (1965) *Machiavelli and Guicciardini: Politics and History in Sixteenth-Century Florence* (Princeton: Princeton University Press).

Guicciardini, Francesco, CM, *Considerazioni sui «Discorsi» del Machiavelli*, in *Francesco Guicciardini Opere*, a cura di Vittorio de Capraris (Milano, Napoli: Riccardo Ricciardi, 1961), pp. 331-342.

DF, *Dialogo del reggimento di Firenze*, in *Dialogo e discorsi dei Reggimento di Firenze*, a cura di Roberto Palmarocchi, in *Opere*, vol. 7, (Bari: Gius. Laterza & figli, 1932), pp. 1-172. 末吉幸州訳『フイレンツェの政体とボサの対話』(太陽出版、二〇〇〇年)。

DL, *Discorso di Logrognò*, in *Opere di Francesco Guicciardini*, vol. I, pp. 247-296.

GF, *Del governo di Firenze dopo la restaurazione de' Medici nel 1512*, in *Dialogo e discorsi*, pp. 280-286.

MA, *Del modo di assicurare lo stato alla casa de' Medici*, in *Discorsi e discorsi*, pp. 267-281.

- Ricordi [Q. B. C] (Firenze: Sansoni, 1951). 末吉孝州訳「グイッチアルディーニの「訓戒」と「意見」(リコルデイ)」(太陽出版、1996年)。「リコルデイ」については慣例に従い、一五二二年までにまとめられたものをQと表記する。「リコルデイ」の一五二八年版をB、一五三〇年版をCと表記する。引用の数字は、リコルデイの番号である。
- SF, *Storie fiorentine* (Milano: BUR, 1998). 末吉孝州訳「フィレンツェ史」(太陽出版、一九九九年)。
- Machiavelli, Niccolò, AG, *Dell'arte della Guerra, in Tutte le Opere* (Firenze, Milano: Giunti, 2018), pp. 923-1128.
- DT, *Discorsi sopra la prima deca di Tito Livio* (Milano: Rizzoli, 永井三明訳「デイスコルシ」)『マキアヴェッリ全集・二』(筑摩書房、一九九八—二〇〇〇年)。「表記は『巻・章の順である』。
- JP, *Il Principe*, a cura di Giorgio Inglese (Torino: Giulio Einaudi, 1995). 池田廉訳「君主論」(『全集・一』、三一—八八頁)
- LE, *Lettere, in Tutte le Opere*, pp. 2159-3054. 松本典昭・和栗珠里訳「書簡」(『全集・六』、一六九—三四八頁)。
- DR, *Discursus florentinarum rerum post mortem iunioris Laurentii Medicis*, in *Tutte le Opere*, pp. 157-173. 石黒盛久訳「小ロレンツォ公没後のフィレンツェ統治論」(『全集・六』、一三三—一六二頁)。
- Phillips, Mark (1977) *Francesco Guicciardini: The Historian's Craft* (Toronto and Buffalo: University of Toronto Press).
- Pocock, J.G.A. (1975) *The Machiavellian Moment: Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition* (Princeton: Princeton University Press). 田中秀夫・奥田敬・森岡邦泰訳『マキアヴェッリアン・ローメーター——フィレンツェの政治思想と大西洋圏の共和主義の伝統』(名古屋大学出版会、二〇〇八年)。
- (1978) 'Machiavelli and Guicciardini: Ancients and Moderns', in *Canadian Journal of Political and Social Theory*, 2, pp. 93-109.
- Zimmermann, T. C. Price (2016) 'Guicciardini, Gioivo, and the Character of Clement VII, in *The Pontificate of Clement VII: History, Politics, Culture (Catholic Christendom, 1300-1700)* ed. by Kenneth Gouwens Sheryl E. Reiss (Routledge: Oxon and New York) [c. 2005], pp. 19-27.
- Ridolfi, Roberto (1967) *The Life of Francesco Guicciardini* (Routledge & Knopf: New York [1960]).
- Sasso, Gennaro (1984) 'Guicciardini and Machiavelli', in *Francesco Guicciardini 1483-1983: nel V centenario della nascita* (Firenze: Leo S. Olschki), pp. pp. 3-130.
- Silvano, Giovanni (1985) 'Vivere civile' e 'governo misto' a Firenze nel prima Cinquecento (Bologna: Patron).
- Skinner, Quentin (1978) *The Foundations of Modern Political Thought* (Cambridge: Cambridge University Press). 門間都喜郎訳『近代政治思想の基礎——ルネッサンス・宗教改革の時代』(春風社、二〇〇九年)。
- Stephens, J. N. (1983) *The Fall of the Florentine Republic, 1512-1530* (Oxford: Clarendon Press).

家田義隆（一九七二）「グイチャルディーニの思想——リコルデイを中心としてマキアヴェッリとの対比で」『イタリア学会誌』二〇号、四五―六二頁。

鹿子生浩輝（二〇二三）『征服と自由——マキアヴェッリの政治思想とルネサンス・フィレンツェ』（風行社）

——（二〇一七）『時間の政治学』——ポーコックと政治言説史』『思想——政治思想史の近代』第一一七号（岩波書店）第五号、

一〇九―一二八頁。

——（二〇一八）『思慮ある民主政——グイッチアルディーニの『対話』』『法学』第八二卷第一号、一―三三頁。

佐々木毅（一九七〇）『マキアヴェッリの政治思想』（岩波書店）。

末吉孝州（一九九六）『解説』『リコルデイ』（太陽出版）、二五三―二七〇頁。

本研究は、科研費18K00100、15H03287の助成を受けている。